大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

マイケル・ポランニーの自生的秩序論における暗黙知の役割

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今池, 康人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00016755

マイケル・ポランニーの自生的秩序論における暗黙知の役割

今　池　康　人

1．はじめに

マイケル・ポランニー[1]（Michael Polanyi, 1891－1976）は20世紀のシカゴ大学に所属する自由主義者の一人であり、同時期にシカゴ大学に所属したフリードリヒ・ハイエク（Friedrich August von Hayek, 1899－1992）との関係を指摘されるなど、多大な影響力を持った人物である。しかし、彼はハイエクとは大きく異なる自生的秩序[2]論者であり、また、フランク・ナイト（Frank Hyneman Knight, 1885－1972）から批判を受けるなど、独自の自由主義思想を展開した人物でもある。彼の研究は多岐にわたり、初期は物理化学者として多くの輝かしい実績を残したが、1940年頃から社会科学へと転向を果たす。その後も『自由の論理』（1951）において自生的秩序概念に触れるなど、自由論に対する論述を行った後、『個人的知識』（1958）や『暗黙の次元』[3]（1966）など、知識論の分野に活躍の場を移していった。そして、ポランニーの名がもっとも知られているのは暗黙知に関する研究であろう。特に日本においては、経営学に暗黙知の議論が取り入れられた。また、これら暗黙知の議論は、パラダイム論で知られるトーマス・クーン（Thomas Samuel Kuhn, 1922－1996）との関係も指摘される。

暗黙知に関する先行研究に目を向けると、野中（1996）が最も知られている。野中は、日本的経営を暗黙知の概念を使うことで説明し、経営学における暗黙知の存在を作ったといってよいだろう。彼の研究は暗黙知の名を広く知らしめたという点では評価できるが、その内容はポランニーのものと大きく異なる。ポランニーの暗黙知が言語化や伝達が不可能な知識であるのに対し、野中は各個人の暗黙知を形式知化（言語化）し、その知識を共有するモデルを構築した。このように両者の暗黙知は別種のものであり、注意が必要であろう。また、佐藤（2010）は暗黙知の議論に対し「我々の知覚や認識の背後に明確な言葉で表現できない『暗黙の次元』が存在するという事実の指摘に留まるなら、率直にいって、ポランニー知識論の意義はさして大きなものではない…ポランニーが独特の知識論を構築する究極の意図は、より高いところにある。ポランニー知識論は…世界と人間存在の意味を明らかにしようという、恐るべき目的を持っているのだ」[4]と述べ、暗黙知の議論が単なる知識論でなく、「世界」や「人間」が持つ「究極の意味」の探究を目指した議論であると指摘した。

また、ポランニーの自由論に関してはハイエクとの関係でたびたび議論される。特にアレン（1996）はハイエクとポランニーの政治思想を分析し、両者が自由そのものに本質的な価値を見出すのではなく、自由に手段的な価値を見出していると指摘した。そして、ハイエクと比較し、ポランニーが自由をより積極的な意味で捉えていることを明らかにした。また、ポランニーの自由論に対する重要な研究としてムーディ（2016）が挙げられる。ムーディはポランニーの1910年代の論文である「調停者のために：ヨーロッパの戦争と平和に必要な見地」（1917）や「新たな懐疑論」（1919）などの存在に触れ、ポランニーが物理化学者時代から社会科学に関心を持っていたことを指摘する。そして、ポランニーがヨーロッパにおいて自生的秩序に基づく主権国家間の相互調節モデルを提示していたことを明らかにした。

このようにポランニーの自由論や知識論に関する研究は多々あるが、両者を結び付けた研究は数少ない。渡辺（2006）は「科学者コミュニティの発生と成長に関する優れた洞見から政治秩序を説き起こすポラーニの論法は、科学者ポラーニにしてはじめて可能になる特異な政治思想につながる」[5]と述べ、ポランニーの科学哲学と政治思想の関係に触れるが、その程度にとどまる。特に、ポランニーの自由論における重要な要素である自生的秩序と暗黙知の関係に関する議論はほとんどないと言っていいであろう。その原因として、自生的秩序などの自由論を中心とした『自由の論理』と暗黙知に関する著作『暗黙の次元』の間に15年の歳月があることが考えられる。しかし、ポランニーの『個人的知識』や『暗黙の次元』、そして同時期の論文を見ると、それらが知識論だけでなく社会や自由について大きく関わっていることは明らかである。

そのため、本稿では、ポランニーの自由論と暗黙知の関係について検討する[6]。ポランニーは知識論に関する著作においても自由社会の存在に触れ、また、自由論においても科学者の自由を重要視するなどをしており、知識論と自由論の関係性が見られる。であるならば、ポランニーの知識論において重要な概念である暗黙知もまた、彼の自由論と重要な関係を持つと考えられる。特に、自由論において重要な要素である自生的秩序概念と暗黙知に関しても関りがあるのではないだろうか。本稿の目的はポランニーの暗黙知と自生的秩序論の関係を検討し、両者のつながりを明らかにすることである。

２．ポランニーにおける自由な社会と自生的秩序

まず初めに、ポランニーの自由論について簡単に触れたい。ポランニーは、自由を私的自由と公的自由の２つに分け、両者の範囲は一致しないと考える。これら２つの自由は具体的にどのようなものなのか。ポランニーは次のように表している。

「奴隷制や農奴制の条件下では、私的自由と公的自由は一緒にゼロまで引き下げられていた。」[7]

「スターリン体制の下では私的自由の範囲はビクトリア朝のイギリスよりもずっと広く保たれているが、公的自由は比較にならないほど小さいのだ。」[8]

ポランニーは私的自由について、「個人が自分の自由意思で、罰や非難を浴びる危険なしにできること」[9]と述べる。私的自由とは、「社会的には無効」[10]な自由であり、奴隷制や農奴制の下では保たれず、スターリン体制下であっても保たれる範囲のものである。その範囲は非常に狭い範囲に限定され、家庭内においてなにかを思考する、飲食を行う、といった程度に限られるだろう。それに対して、公的自由とは「それを通じて個人主義が社会的機能を果たす」[11]自由である。そして、ポランニーは２つの自由は共に保護に値すると述べつつも、公的自由が自由社会を特徴付けるものと考え、公的自由をより重要なものとした。

それでは、ポランニーの公的自由はどのようなものか、より深く検討したい。ポランニーはこの種の自由を公的自由と名付ける際に、次のように説明する。

「社会の動態的秩序の維持と成長には私的自由の主張をはるかに超える自由が必要である。動態的秩序の構築に参加する個人は、すべて独立し行動する。…彼は自分の信念に基づいて行動する自由を与えられなければならない。この自由は多くの点で私的自由に反している。１人にされることや好きに行動することは欲望の充足を意味しない。…その私たちに関する自由は、決して個人の利益のためでなく、…共同体の利益のために存在する。それは責任ある目的を持つ自由であり…特権は義務と結びついている。それゆえ、それは私的自由と反対に、公的自由と呼ばれるのがもっともだろう。」[12]

ポランニーの説明からわかる公的自由の特徴とは、それが社会の利益のために存在し、自由を持つ個人が責任を負う義務を持つというものである。そして、そのような個人は社会における動態的秩序[13]の維持にも貢献する。ポランニーの社会観では、社会の個々人は信念を持ち、独立した目的で行動するが、秩序のもとで相互調節され、よりよき結果を生み出す。

では、ポランニーの考える秩序とはどのような種類のものか。彼は秩序を自生的秩序（社会の自発的な秩序）とコーポレーション的秩序（意図的な秩序）の２つに区別する。そして、ポランニーは自由と秩序の関係について、「公的自由の論理は独立の個人の活動を、一定の課題の実現のために自発的に相互調節すること」[14]と述べる。ポランニーにとって自生的秩序（市場など）は公的自由を体系的に実現する社会秩序である。また、自生的秩序のシステム

においては、所属する個人一人一人が相互調節を行い、より高度で複雑な結果が導かれ、コーポレーション秩序では代替できないと指摘した。先ほど述べたように、ポランニーは秩序の維持と発展のためには公的自由が必要であると考えた。しかし、公的自由を持った個人の所属する社会が発展するのもまた、自生的秩序が社会に存在し、個々人間の相互調節がなされるからである。これらの点から、ポランニー思想における公的自由と自生的秩序の存在は互いに不可分のものであると言えるだろう。

３．社会における専門家と革新

このように、ポランニーの考える自由な社会は自生的秩序による統治を前提とする。しかし、それと同時に、このような社会に対しては全体主義の観点から３つの批判点があると自ら述べる。第1に、公共の福祉を個々人の個人的決定と動機に明け渡してしまうという批判である。公的自由による社会では、個々人は信念を持ち、独立して行動するが、科学者、判事、学者、宗教家、ビジネスマンなどは、自分の行動が公共の福祉全体にどのような影響を与えるのかを知らないし、仮にそうした知識があったとしても、それによって自分の専門的な義務の遂行から目を逸らすことは許されない。第2に、社会を特権的寡頭制に委ねる、といった批判がある。科学者、判事、学者、宗教家、ビジネスマンらは公共の福祉に大きな力をふるい、特に、「著作する専門職の色々の分野－詩人、ジャーナリスト、哲学者、小説家、説教師、歴史家、経済学者－の育成する精神活動は多分、公的な事柄を形成し、社会の運命を指し示す上で最も決定的なものである」[15]と述べ、公的自由による自生的秩序のシステムが寡頭体制に見えることを指摘する。最後に、公的自由に社会を任せると、社会がだれも望まない方向に漂っていくのを許してしまうという批判がある。公的自由に基づく自生的秩序とは相互調節のシステムであり、その下では社会は未知の方向に動いていく。

ポランニーはこういった問題に対し、半ば批判を受け入れている。しかし、なお、ポランニーの議論には価値がある。３つ目の批判に対しポランニーは、実際われわれは漂っており、未来は未知であると考える。未来を意識的に決定することこそ我々の理解を超えるものであり、そのような歴史の計画化は認められない。また、こうした社会においては寡頭制システムも必要とされる。ポランニーは「独立の相互調整によってのみ達成できる課題は、独立の地位を支持する制度的な枠組みを要求する…そうした特権のシステムは受容されるべきである―特にそれが機会の平等と結びついているときにはそうだ」[16]と述べ、特権階級の必要性を認めている。ポランニーは、人間が作ったコーポレーション的秩序よりも自然発生的な自生的秩序が優れていると考えたが、それは管理システムとしての優位性であり、より良い未来に導かれる、といった性質のものではない。そのような社会の中で、ポランニーは専門家

が社会を導くことを求めた。それは一種の寡頭制システムであるが、それもまた自由な社会にとって必要となる。専門家たちは、公的自由に基づき利益を求め行動するが、社会全体で見ると、各個人の行動は意図せず、相互調節される。ポランニーは後に出版した『個人的知識』においても同様の理論を展開している。彼は、「自由社会は、いかにリベラルだとしても、それは深く保守的なものだ…この伝統は、権威を持った専門家の特別の集団により伝達され育まれるものであり…この正統、そしてまたわれわれの尊敬する文化的権威は国家の強制力にさせられており、権力と財産の需要者から資金を与えられているのだという事実にも直面しなければならない」[17]と指摘する。

ポランニーの考える自由社会は伝統などの自生的秩序に基づく社会であるが、それは一部の特権的な専門家による寡頭制と両立している。このように、自生的な秩序に基づき専門家による寡頭制に身を任せたその姿は、保守的な社会と言っていいだろう。しかし、保守的な枠組みにおいて社会はどのようにして発展していくのであろうか。ポランニーは次のように指摘する。

> 「文学と色々な芸術 ―絵画的および音声的―、工芸 ―医学、農業、工業、種々の技術サービスを含む―、宗教的・社会的・政治的思考の総体、―これらはみな、そしてその他の人間文化の領域も、上で科学と法について述べたのと同じような自発的秩序の方法によって育成される。これらの領域の各々は、総ての人が接近可能な共有の遺産を現すが、これに対して各世代の創造的個人は革新を提案することによって応答し、この革新がもし受容されればそれは共有の遺産に同化され、来るべき諸世代のための案内として受け継がれるのだ。」[18]

ポランニーは伝統的な自生的秩序に基づく社会においても創造的個人が生まれ、革新が起こることを指摘する。では、伝統的で保守的な社会において、どのように創造的個人が生まれ、人は革新を起こすことが可能なのだろうか。残念ながら、ポランニーは自身の自由論を展開した、『自由の論理』において、その問題には一切触れていない。しかし、ポランニーは『自由の論理』の執筆後、自身の研究の舞台を知識論の場に移している。そのため次節では、ポランニーの後の研究に注目し、人がどのようにして革新を起こすのかを検討したい。

4．暗黙知と革新

ポランニーは、暗黙知[19]に関する解説論文「創造的想像力」において、科学者たちがどのようにして革新を起こすのかについて説明する。そこで彼は、「科学者は、漠然としか自分

の目的が分からない。そして、自分を発見に導いてくれる、深まっていく調和に対する自らの直感に頼らざるをえない」[20]と述べ、科学における新たな発見が科学者の直感によるものだと指摘する。一見すると、直感に頼る思想は、科学者個人の才能や運の要素が大きくあやふやなものに見える。しかし、ポランニーの考える人間の直感は、そのようなものとは大きく異なる。ポランニーは、人間の意図した行為には全体従属性があることを指摘し、人間の筋肉を例に挙げ次のように述べる。

「事物についてのあらゆる想像を、私は想像力と呼ぶ。自分の腕を持ち上げようとするとき、そうしようと思うことは自分の想像力の一つの行為である。この場合、想像するのは視覚的なものでなくて筋肉的なものである…たとえ腕を持ち上げるという別に努力を要しないことのなかにおいても、意識的意図つまり筋肉的実行とは別の想像行為を認識することができる。というのは、われわれは決して筋肉動作をそれとして命じていない…デリケートに配置された筋肉を収縮させる見事な芸当は、われわれの想像行為の一結果として、ひとりでにしか起こり得ないのである。」[21]

本来、腕を上げるという行為は腕の様々な筋肉に個別に指示を出すことで行われる。しかし、われわれは腕を上げよう、と意識するだけである。このように、人間の運動は二重構造になっており、「達成は全体従属的レベルで生み出された」[22]のである。人間の意図的行為には意識できないが全体従属的なものが存在する。このように、人間には意識できず、語ることはできないが結果から見ると存在することがわかる知識が存在する。ポランニーは、それを「暗黙知」と呼んだ。

人間の直感についても同様であり、科学者が直感を得、想像力を働かせる背景にも暗黙知が全体従属的に存在する。科学者たちは探究を行っていく過程で、様々な知識を暗黙のうちに蓄積する。そのような暗黙知が直感の源泉となり、科学者たちは、よくわからないながらも直感に導かれ、想像力を発揮し目的に向かって研究を行う[23]。これまでの社会における様々な革新にはこのような背景があった。暗黙知に関する議論は、一般的に身体的な特質や経営学的な産物に関するものが多い。しかし、暗黙知とは決してそれだけのものではなく、科学的発見に関する議論でもある。

これまでの議論を整理すると以上のようになるであろう。すなわち、ポランニーの理想とする社会は自生的秩序に基づく社会である。それは保守的な社会であるが、創造的個人が誕生し、社会に革新を起こす。また、人は暗黙知があるからこそ直感を働かせ革新を起こす。つまり、暗黙知はポランニーの自生的秩序論において必要不可欠な要素である。

しかし、ここで重大な問題として、『暗黙の次元』において自生的秩序という単語が全く

登場しない点が挙げられる。そのため、現状の議論では、暗黙知の議論が偶然自生的秩序論に合致しただけで、ポランニー自身も意識していなかったのではないか、という批判を免れないであろう。そこで次節では、『暗黙の次元』自体や、『自由の論理』から『暗黙の次元』の過程で、たとえ明示されていなくても自生的秩序の議論が続いていることを明らかにする。

5．暗黙知と自生的秩序の繋がり

5.1．探究者の社会

ポランニーの暗黙知に関する主著『暗黙の次元』においては、暗黙知の議論は人間の知性に関するものだけではない。彼は、「はたして暗黙的認識に長じ進化論的創発に由来する知能は、もし人間に道徳感覚があるとするなら当然求められるべき、責任ある判断というものを下すことができるのだろうか？」（Polanyi 1966b, 56/訳95）という疑問を挙げ、どのような社会が形作られるべきかに議論を移す。そして、ポランニーは「探究者の社会」の概念を提示する。世界中で、個々の研究者たちは狭い専門分野の研究を各自で行っている。それらは独立しているように見えるが、実際は相互に調節しあう。

> 「私はすでに相互制御の原理について述べている。すなわちこの原理によって、各々の科学者は、それぞれ独立して、自分がほとんど何も知らない膨大な探求領域の科学的伝統を維持するために、自分の役割を果たすのである。探究者の社会は、こうした相互に及ぼしあう権威によって、徹頭徹尾制御されている。」[24]

このように、探究者の社会における科学者たちはお互いに時には議論しあい、時にはライバルとなり、広大な科学体系を構築していく。このような社会で研究者は隠された潜在的可能性を現実化しようと努力し、その結果、革新が達成される。また、この種の議論は、『暗黙の次元』の後の論文である、「社会における科学の成長」において、さらなる展開を見せる。ポランニーは相互調節について、「その原理の本質は、学者たちがお互いに監視し続けるという事実にある」[25]と指摘する。お互いに監視し合うことで、批判し合い、勇気づけられ、科学的見解が形成される。このような相互調節は、当然、密接した領域間でしか起こり得ないが、「科学者たちの制限された領域は、科学の全範囲にわたる、重複している隣接領域からなる連鎖を形成する」[26]と述べ、連鎖していくことで、迂遠な領域同士でも間接的な合意が形成されるとポランニーは考えた。このようにして組織された科学的共同体において、科学者は共通の信念によって伝えられた伝統を信奉し、責任を引き受ける。

このように、個々人は断片的な領域内で潜在的思考を行い、独自性を持つにすぎないが、

探究者の社会においては様々な思考の可能性の影響を受けることができ、我々は自己決定の絶対化を免れることができる。暗黙知による直感により創造された理論は、このような科学者たちの相互調節により、より良いものへと高められていくのだ。

『暗黙の次元』や「社会における科学の成長」における社会観は、一見すると、突然出てきたもののように思われる。しかし、このような議論は、1940年代から継続して研究されたものである。特に、ポランニーが『自由の論理』において科学における相互調節機能を自生的秩序の1つとして詳細に説明している点に注目したい。ポランニーは自生的秩序の例として、経済や知的領域における自生的秩序を挙げる。まず、経済領域の秩序に関しては、市場の存在を挙げる。市場においては競争による相互調節がなされると指摘し、市場における秩序を「競争する個人の集体に基づく経済生活のシステム」[27]と表現している。そして、ポランニーは市場に対して、「社会における自発的システムの最も巨大な事例」[28]と評価している。しかし同時に、「私はここでその主要特徴を概観しようと思うが、それはただ、この特定の自発的システムを性格の異なる他の自発的システムと比較するために必要とされる限りである」[29]と述べるなど、市場への評価は低い。そして、ポランニーは知的秩序、特に科学における秩序を最も重要なものと位置付ける。科学の世界において科学者たちは「協議」、「競争」、「説得」の３つの過程からなる相互調節により発展する。その全体の流れを順に解説すると、まず、科学は過去に確立された膨大な知識を前提とし主張を公表する（協議）。そして、科学の作業においては発見の追求や物的資源の確保において競争的な力が働く（競争）。そして、科学的主張が行われる際、公開討論が行われる。各参加者は議論し合い相互に高め合う（説得）。

この、ポランニーの科学における秩序の議論は探究者の社会に類似している。科学秩序において、探究者の社会と同様に、科学者たちは相互に影響しあいよりよき結果を導いていく。しかし、この時点ではまだ暗黙知やそれに類する研究はさほど行われておらず、科学者間の相互調節は直接的なものにとどまっている。ここでのポランニーの議論は、『暗黙の次元』における「探究者の社会」のひな形であると言えよう。『暗黙の次元』においても自生的秩序に関する知的秩序の議論は色濃く残っている。では、経済秩序など知的領域以外の議論と探究者の社会に関係はあるのだろうか。更なる検討を重ねたい。

5.2. 探究者の社会と自由社会

ポランニーの探究者の社会は、主に科学界を中心とした議論であり、政治についての議論の多くは政治的な教義から科学を守る、といったものが多い。しかし、自生的秩序に関する議論と同様、経済・政治・文化などその他の分野においても探究者の社会が存在し、科学と同様、互いに監視し、議論し合うことで相互調節することを指摘する。

「探究者の社会は、こうした相互に及ぼし合う権威によって徹頭徹尾制御されている。文学や芸術の世界で行使される圧力は悪名高い。…そうした諸集団…は、近代の全体主義者からは恐れられ憎悪される…彼らは科学者集団よりも恐れられる。なぜなら文学と詩の真実、歴史と政治思想の真実、哲学、道徳、法原理の真実は、科学の真実よりも、全体主義にとっては致命的な問題だからだ。…今や私は科学的探究の基調をなす諸原理を大雑把に一般化して、科学以外の人間の諸観念の醸成をもその中に組み込んだ。その結果分かったのは、ところを問わず、私たちの自己決定に対して、たいへん綿密に、思考の成長が本質的な限定を加えているということである。その人の天職が文学・芸術にあろうと、道徳的・社会的改良にあろうと、最も革命的な精神の持ち主ですら、自分の天職として、小さな責任領域を選ばざるをえないだろうし、それを変化させるためには、その前提として、周囲の世界に依拠することになるだろう。」[30]

このように、ポランニーは科学と同様の原理がその他の分野にも及んでいることを示唆する。彼らはいかに優秀であっても小さな責任領域しか持たないが、密接した領域ごとに相互に調節しあう。探究者の社会とは決して科学界だけのものではなく、自生的秩序と同じく社会の様々な分野に存在する。

また、探究者の社会と自由社会の関係については、1962年の論文「科学の共和国 ―その政治的･経済的理論―」においても議論される。この論文は科学の共和国（科学者たちの共同体）に関して論じたものだが、この科学の共和国に関してポランニーは、「科学の共和国は探検家の社会である。このような社会は未知の未来に向かって努力する。…これら探検家たちが知的な満足をえるとき、彼らはすべてのひとびとを啓発し、したがって、社会が知的な自己改良に向かって自らの義務を履行するのを手助けするのである」[31]と指摘するなど、科学の共和国と探究者の社会は同様のものと考えてよいであろう[32]。そして、ポランニーは『暗黙の次元』と同様、科学者たちが意図せずとも相互調節している点を指摘する。さらに、ここではそれだけに留まらず、「科学者たちの共同体は、国家のもついくつかの特徴に類似した仕方で、また物品の生産がそれによって規制される原理に似た経済原理に従って機能する方式で組織化されている」[33]と述べ、探究者の社会が政治・経済の範型であることを指摘する。そして、ポランニーは市場について以下の様に述べる。

「自己調整の過程による個々の科学的努力のできるだけ高度な調整について、ここでわたしが語ってきたことは、市場で取引する生産者と消費者によって達せられる自己調整を思い起こさせるかもしれない。…実のところ、わたしは、市場の調整機能は相互調節による調整の特殊な事例にすぎないということを示唆しているのである。科学の場合、調節は

他の科学者の公にされた成果に注目することによって生じるが、市場の場合、相互調節は供給を需要に応じさせる目下の交換関係を広める価格体系によって媒介される。」[34]

ポランニーの市場に関する議論自体は一般的なものにすぎないが、ここで重要なのは市場を相互調節の事例に挙げている点である。この議論は、『自由の論理』における自生的秩序に関する議論と同様のものである。

そして、ポランニーは科学の共和国（探究者の社会）の理論が自由社会の発展にも関与することを指摘する。彼は、「自由社会は自己改良 ―あらゆる種類の自己改良― の探究に全力を傾けているとみなされよう。このことは科学の共和国を支配している原理のある一般化を示唆している。発見に力を傾注している社会は、互いに調整し合う自立した創意を支持することによって、前進していかねばならない」[35]と述べ、科学の共和国（探究者の社会）の理論が科学界だけでなく自由社会全体に適応されることと、社会の個々人の創意が相互に調整され発展していくことに触れる。そして、このような社会の自由について、「このような社会は広汎な私的自由を特に提供するわけではない。公的自由を培うことこそ…自由社会を際立たせるものなのである」[36]と述べ、自由社会において公的自由がより重要であると考えた。これらの公的自由や自由な個人の相互調節を重視する点は、本稿の２節で議論した、自由社会と自生的秩序に関する議論と同様のものである。このように、ポランニーの探究者の社会に関する議論は、自生的秩序に関する議論を色濃く残したものであると言える。

ポランニーの自由論と暗黙知の議論は一見すると、無関係なものとして捉えられる。しかし、『自由の論理』において行われる議論はその15年後に出版された『暗黙の次元』における「探究者の社会」までその流れが続いており、暗黙知の概念は自由論と同じ文脈で議論されたものである。同時に、暗黙知の議論は、『自由の論理』における専門家の社会や自生的秩序の補完を行うものでもある。これらの点から、ポランニーの自由論を議論する上で、暗黙知概念の役割は非常に重要であると言えよう。

６．むすび

本稿ではポランニーの自生的秩序論と暗黙知の関係について議論した。ポランニーは自由な社会において自生的秩序の重要性を指摘した。そして、そのような社会では専門家が社会を導き、また、各世代において創造的個人が革新を提案すると考えた。そして社会における革新について、ポランニーは暗黙知を用いて解説する。人々は、現代社会に生活する中で、様々な知識を無意識に蓄積していく。また、科学者たちの研究は無意識のうちに相互調節され、それらが革新の源泉となる。そして、このような暗黙知を持った人間が作るべき「探究

者の社会」は自生的秩序に基づく社会と同様のものであり、彼の暗黙知の議論が自生的秩序論をその基礎においている。このことから、ポランニーの暗黙知が自生的秩序論において重要な立場を持つことは明らかであろう。

第２次大戦から冷戦期において全体主義的な政策や国家主導の科学開発が大きな力を持った。そのような時代においてポランニーは、自生的秩序に基づく伝統的な自由社会の姿を求めた。そして、科学界への政府介入に対して警鐘を鳴らし、科学者たちが互いに監視し合う探究者の社会の姿を提示した。暗黙知を持った科学者たちの社会は相互に調節し合い、国家の介入がなくとも技術の発展や社会への貢献が可能となる。この議論は、自生的秩序に基づく伝統的な自由社会がどのようにして革新を起こすのか、という問いに対する答えでもある。このように、暗黙知に関する議論は、自由主義社会に新たな可能性を示すものであり20世紀の自由論の研究を行うにおいて非常に重要な意味を持つであろう。

注

1　マイケル・ポランニーは、『大転換』などでよく知られるカール・ポランニーの弟である。だが、両者はその思想の違いから疎遠となっている。

2　人間による設計ではなく、自生的に発展してきた秩序であり、伝統や自然法、市場などが例に挙げられる。「自生的秩序（spontaneous　order）」に代表されるように、一般的に‘spontaneous’は「自生的」と訳されることが多い。しかし、ポランニーの著作『自由の論理』や『知と存在』においては、‘spontaneous order’は、「自発的秩序」、そして、‘spontaneous co-ordination’は「自発的調整」と翻訳される。本稿では混乱を避けるため、引用部分のみ「自発的秩序」、「自発的調整」の用語を使用し、その他の部分では全て「自生的秩序」、「自生的調整」で統一する。

3　*The Tacit Dimension*は本来『暗黙の次元』と訳すべきであろうが、暗黙知の知名度のためか、通常『暗黙知の次元』と訳される。しかし、この著作は決して暗黙知だけを取り扱ったものではなく、タイトルを不必要に暗黙知に近づける必要はないと思われるので、本稿では参考文献一覧を除き『暗黙の次元』で統一する。

4　佐藤（2010), p.233-234頁。

5　渡辺（2006), 521頁．渡辺はPolanyiをポラーニと表記するが、ポランニーとするのが一般的である。そのため、本稿では引用部を除きポランニーに統一する。

6　暗黙知という言葉は、おそらくポランニー研究においてもっともよく知られた言葉であるが、その知名度に反して、ポランニーの著作において出てくる頻度はさほど多くない。特に、ポランニーの知識論に対する大著『個人的知識』においてはほとんど登場しないといってよい。しかし、『暗黙の次元』がより後発の著作であることや、両著作に関して「ポランニー哲学の理解の根幹にかかわるような変化はないようである」（佐藤 2010, 229）と評価されていることを踏まえ、本稿で

は『個人的知識』ではなく、『暗黙の次元』に注目し検討を行う。

7　Polanyi（1951）, p.158, 199頁.

8　Polanyi（1951）, p.158, 200頁.

9　Polanyi（1951）, p.158, 199頁.

10　Polanyi（1951）, p.158, 200頁.

11　Polanyi（1951）, p.158, 200頁.

12　Polanyi（1941）, p.438.

13　ポランニーは相互調節される秩序に対し当初は「動態的秩序」という用語を使用していた。しかし、後に『自由の論理』において、「自然の中には類似のタイプの秩序を示現するそうしたシステムが広汎に見出される。それらはケーラーが『動態的秩序』と呼んだものである。私も以前の著作で彼の呼称に従ったことがあるが、しかしそれらを自発的秩序と呼んだ方が簡単だろうと思う」と述べ、用語の変更を行い、ゲシュタルト心理学の代表的論者であるヴォルフガング・ケーラーからの影響を認めている。自生的秩序概念とゲシュタルト心理学の関係は非常に興味深い問題であるが、本稿の目的からは離れてしまうため、それらの議論については今後の課題としたい。

14　Polanyi（1951）, p.198, 244頁.

15　Polanyi（1951b）, p.195, 241頁.

16　Polanyi（1951b）, p.199, 245頁.

17　Polanyi（1958）, p.244-245, 229-230頁.

18　Polanyi（1951）, p.165, 208頁.

19　暗黙知とはその名の通り、直接知ることはないが、暗黙のうちに知っている知識を指す。例えば、人の顔を認識する際、顔の諸部分（目、鼻、口など）に注意を払い、それから顔全体に注意を移していく。自身では、顔の諸部分に注意を払っていることを意識できないが、暗黙のうちにそれを知り、行っている。われわれは、暗黙知を知覚できないが、人の顔を判別できるという結果から逆算すると、それを行っていると知ることができる。

20　Polanyi（1966a）, 22頁.

21　Polanyi（1966a）, 20頁.

22　Polanyi（1966a）, 21頁.

23　例えば、ポランニーはアインシュタインの活動について、「相対性の発見に至ったアインシュタインの研究ほど、狙いが不確かだった研究はあるまい。それでも彼は、長年いつも『研究が何かはっきりしたものへまっすぐに続いているという（研究が向かっていく）感覚があった。』と語っている」［Polanyi（1966a）, 23頁］と指摘する。

24　Polanyi（1966b）, pp.83-84, 138頁.

25　Polanyi（1967）, pp.84-85, 107頁.

26　Polanyi（1967）, p.85, 107頁.

27　Polanyi（1951b）, p.160, 202頁.

28　Polanyi（1951b）, p.160, 202頁.

29　Polanyi（1951b）, p.160, 202頁.

30　Polanyi（1966b）, p.84-85, 139頁.

31　Polanyi（1962）, p.70, 89頁.

32　A Society of Explorersは邦訳の際、『暗黙の次元』では探究者の社会、「科学の共和国 ―その政治的・経済的理論―」では探検家の社会と異なる訳をされている。議論の性格上、探究者の社会がよりふさわしいと思われるので、本稿では引用部を除き探究者の社会で統一する。

33　Polanyi（1962）, p.49, 63頁.

34　Polanyi（1962）, p.52, 67頁.

35　Polanyi（1962）, p.70, 89頁.

36　Polanyi（1962）, p.70, 90頁.

参考文献

Allen, R. T.（1998）, *Beyond Liberalism: The Political Thought of F. A. Hayek & Michael Polanyi*, Transaction Publishers.

Mirowski, P.（1998）, Economics, Science, and Knowledge: Polanyi vs. Hayek, *Tradition and Discovery: The Polanyi Society Periodical* 25（1）: 29-43.

Moodey, R. W.（2016）, The from- to structure of political and economic thinking, *Freedom, Authority and Economics Essay on Michael Polanyi's Politics and Economics*, ed. by R. T. Allen. Wilmington, Delaware: Vernon Press, 121-134.

Nonaka, I and Takeuchi, H.（1995）, *The Knowledge- Creating Company: How Japanese Companies Create the Dynamics of Innovation*. Oxford: Oxford University Press. 梅本勝博訳『知識想像企業』東洋経済新報社, 1996.

Polanyi, M.（1917）, To the Peacemakers: Views on the Prerequisites, *Society, Economics &Philosophy: Selected Papers Michael Polanyi*, edited with an introduction by R. T. Allen, Tansaction Publishers, 1997.

Polanyi, M.（1919）, New Scepticism, *Society, Economics &Philosophy: Selected Papers Michael Polanyi*, edited with an introduction by R. T. Allen, Tansaction Publishers, 1997.

Polanyi, M.（1941）, The Growth of Thought in Society, *ECONOMICA* 8（29-32）: 428-456.

Polanyi, M.（1951）, Manageability of Social Tasks, *Logic of Liberty: Reflections and Rejoinders*. Chicago: Chicago University Press, Midway Reprint, 1980, 154-200. 長尾史郎訳「社会的課題の管理可能性」、『自由の論理』, ハーベスト社, 1988, 195-248.

Polanyi, M.（1958）, *Personal Knowledge: Towards a Post- Critical Philosophy*. Chicago: The University of

Chicago Press, paperback ed., 1974. 長尾史郎訳『個人的知識－脱批判哲学をめざして』, ハーベスト社, 1985.

Polanyi, M.（1962）, *Knowing and Being: Essays by Michael Polanyi*, ed. by M. Green. Chicago: University of Chicago Press. 佐野安仁他監訳「科学の共和国 ―その政治的・経済的理論―」、『知と存在』晃洋書房, 1985, 63-91.

Polanyi, M.（1966a）, The Creative Imagination, *Chemistry and Engineering News April 25*, 1966, 85-93. 慶伊富長訳「創造的想像力」『創造的想像力』, ハーベスト社, 1986, 3-35.

Polanyi, M.（1966b）, *Tacit Dimension*, New York: Doubleday. 高橋勇夫訳『暗黙知の次元』ちくま学芸文庫, 2003.

Polanyi, M.（1967）, *Knowing and Being: Essays by Michael Polanyi*, ed. by M. Green. Chicago: University of Chicago Press. 佐野安仁他監訳「社会における科学の成長」,『知と存在』晃洋書房, 1985, 92-109.

佐藤　光.（2010）,『マイケル・ポランニー「暗黙知」と自由の哲学』, 講談社.

渡辺　幹雄.（2006）,『ハイエクと現代リベラリズム「アンチ合理主義リベラリズム」の諸相』, 春秋社.